AGC レポート
山岳地理クラブ会報

VOL　５７

発行 2017 年 1 月 31 日
日本山岳会　山岳地理クラブ
URL●www.jac.or.jp/doukoukai/

奥秩父滝川・豆焼沢の作業道

富永　滋

[概要]

豆焼沢は雁坂嶺に発する秩父を代表する渓の一つで、源頭から引いた清水が雁坂小屋の水源にもなっている。昭和初期の原全教の報告当時の美渓は、伐採と国道 140 号の建設で様変わりしたが、国道からの便の良さ故、秩父側では入渓者が多い渓の一つであろう。

渓には昭和の初め頃から一本の林道があった。豆焼林道と言い、八丁坂で滝川林道から分かれ、まず豆焼沢右岸の 200～300M の高みを行き、トオの滝上の 1230M 圏で左岸に渡って沢の 300M ほど上を進み、続いて宿峰（1865 独標）の尾根を乗越してトーガク沢に下り、地蔵岩付近に登り着くもので、最近歩いてみたが、荒廃が酷くもはや使い物にならない。この豆焼林道の渡沢点（1230M 圏）で分かれて沢沿いに登るのが、ここに述べる「豆焼沢の作業道」である。この渡沢点は両岸ともガレているので、知らなければ豆焼林道が横断することには気づかないが、やや上流の左岸に発見された鍾乳洞「瀧谷洞」調査のため 1990 年頃ここに建てられていたプレハブ小屋関係の廃棄物で、それと知れる。

およそ林道の渡沢点付近を境に、下流が東大演習林、上流が国有林になり、昭和 30 年前後に演習林が、30 年代に掛けて国有林が伐採され、造林ワイヤーやガイシなど当時の遺物が今も生々しく沢沿いに残る。昭和 33～34 年に掛け伊勢湾台風を始めとする風害が重なり、豆焼沢源流部の原生林で風倒木や崩壊が多発した。その被害木販売と合わせて国有林の開発が始まり、昭和 39 年までに源流部がすっかり伐採されカラマツ植林に変わってしまった。

豆焼沢の作業道は、豆焼林道から分かれて源流部の伐採地に至る、この時期の伐採・植林のため一時的に付けられた道と思われ、公知の文献が殆んど残っていない。豆焼沢すなわち秩父営林署 54 林班の雁坂地区は西武建設に立木（リュウボク）販売されたため、作業道を拓いたのは恐らく搬出を請け負った下請け業者であろう。従ってその位置や仕様について秩父営林署は関知しておらず、当時の５万分の１管内図にも収載されていない。作業道が存在した短期間にたまたま通行した山岳家により、僅かな記録が遺されている。森田福市（秩父山岳連盟）は、作業道は豆焼林道分岐付近の作業小屋から、沢沿いに左右に渡り返しながら続いていて、流れを渡るたびに橋が架かり、梯子や敷き詰めた石によりよく整備され、恐らく両門の滝の上辺りの伐採地末端まで続いていたとしている（奥秩父の山と谷―登山地図帳―、昭和 34 年版）。原全教は、栃本の大村氏の情報として、作業道が少なくとも1360M圏左岸支沢出合付近まで延びていたことを記している（奥秩父研究、昭和 34 年）。山崎進は、昭和 39～41 年にかけ林道がこの支沢出合から大滝上と推定される飯場跡まで続き、さらに恐らく植林地を経て雁坂往還まで通じていたと報告している（岳人 231 号、昭和 42 年）。

[記録]

国道 140 号の出会いの丘休憩所から豆焼林道を使って、トーガク沢を渡り、トオの滝で一度豆焼沢の右岸に渡り、再度左岸に渡り返す 1230M 圏の左岸にガレ支沢が入る地点で、「豆焼沢の作業道」に入った。作業道は沢を渡らず右岸を進み、左右同時に支沢が出合う 1250M 圏のミニ十字峡を通過した。この付近の道は崩壊や流失などのため断続的であった。沢沿いの桟橋や石組みは全て流失していたが、足袋とワラジに履き替えれば、ひざ下程度の水深で容易に通過した。

谷幅が狭まり、作業道は左右に渡り返しながら付いていたと思われたが、橋や桟道が全て流失し道筋は不明であ

った。2 段 7M 滝をトラロープで左巻きした上で道型が現れたので、道は手前の山腹を登っていたのかも知れない。その先、今度は左岸に薄い道型が続くようになり、波打つレースカーテンのように幅広く真っ直ぐに落ちる柾小屋滝を眺めつつ、九十九折で登った。踏跡程度の作業道が安定して続き、時々道型が明瞭になることもあった。鮮明な切口の倒木処理の跡、水中に見る古い造林ケーブルなど、往時の活況を示す残置物がしばしば目に入った。

12M スダレ状の滝に近づくと作業道は不鮮明になった。通る者は皆、滝を登るため、道が廃れてしまったのだろう。ここは遡行の定石どおり左のルンゼを登攀した。そのまま沢床を数分も進むと、右岸の高みに再び道型が現れた。すぐに 1360M 圏左岸支沢が入り、ワイヤーが沢を横切る広い河原で道は左岸に移った。頻発する倒木や崩れによる荒廃が目立ったが、作業道は何とか続いていた。10 分ほどで、落差 50M とも言われる豆焼沢の大滝*(写真左)*を迎えた。地形図では 1430M 付近で沢が左折する位置に当たるが、図では滝記号のないただの渓流となっているので標高は当てにならない。台風通過後で水量が多く、滝はフェイス全面が真っ白で、どの記録写真にも増して見事な飛沫を吹き上げていた。

右岸を巻く作業道が突然明瞭になったのは、ここだけは巻道として現在もよく利用されているからだろう。ヒノキとツガの深い森を小刻みに折り返して垂直方向に移動した。遡行者が思い思いに大滝の落口に向かうため、次第に踏跡が分散し不鮮明になったが、作業道は薄い電光型を描いて尚も登り、森林中の斜面に廃棄物が散らばる一帯を通過した。ストーブ、一斗缶、酒ビン、ウイスキービン、ワイヤー、釜、茶碗、缶詰の空缶、生活に関わる全ての廃物が落ちていたが、不思議と小屋跡は見つからなかった。道は小尾根を越え、大滝とそれに続く 2 段 7M 滝を巻いた 1490M 付近で、再び沢に近づいた。僅かな痕跡となってガレた右岸をトラバースし、幅を利かせ始めたシャクナゲヤブを不鮮明な九十九折で登った。

右曲ゴルジュ連瀑帯（1500～1540M）の瀑音を聞く頃、遡行者の巻きの踏跡も混じって痕跡はいよいよ入り乱れた。前進を阻む小さな岩尾根通過のためリッジ沿いに数十 M 以上登るうち、踏跡を失った。漸く岩尾根の向こうに回り山腹を急下すると、微かな道型に出合ったので、正道はもう少し低い位置で岩尾根を渡っていたのだろう。道は緩く登りつつ徐々に流れに近づき、明らかにかつては桟道か梯子があったと見られる水流直上の岩壁で行き詰った。立木を使った泥斜面の渋い下降を覚悟したが、必然か偶然か、運よく下がっていた錆びた造林ワイヤーをザイル代わりに、数 M を下った。洗われて薄くなった道の痕跡を伝ってゴルジュを抜けると、道は左岸に渡り、平凡な河原に焚火跡のある小屋場のような整地を見た。微かな踏跡が続き、河原はやがて快適なナメに変わった。遡行者は例外なくナメを歩くと思われ、道型は必然的に薄くなった。

遠目にもはっきり分かる豪快なモニュメント、それが両門の滝（1620M 圏）*(写真右)*であった。左右とも見事な白波が押し寄せているが、良く見ると雁坂小屋から来る支沢の左股は急な二段でややスダレ状、本流の右股は傾斜が緩めで激しく水頭を立てて滑り落ちていた。この滝を登った後も緩やかなナメが数十 M 続く見事な渓相で、道のことは忘れて夢中で水と戯れた。作業道の痕跡と思しき、左岸の疎林中の草付で滝を巻き、以後もナメに沿って左岸を行く微かな痕跡を見たが、この区間でわざわざ道を歩く遡行者はいないと見え、ほぼ消滅に近い状態であった。1680M 圏右岸支沢出合の平凡な河原が、作業道の終点と推測された。何故ならこの出合は源流のカラマツ植林地のちょうど下端に当たり、沢は急にガレて傾斜を増すので、作業道はここから各方面に分かれて植林地の山腹に入って行くと思われるからである。植林を登る単なる古い踏跡には興味が湧かなかったので、雁坂往還まで沢をそのまま遡上した。

[行程・時間記録]

出会いの丘 5:59―トオの滝―豆焼林道分岐（作業道始点）―ミニ十字峡（沢装備）7:13―1680M 圏右岸支沢出合（作業道終点）10:04―雁坂峠道（沢装備解除）11:28―雁坂小屋―出会いの丘 13:58　（2016 年 9 月 3 日訪）

作業同で見る廃棄物の残骸

作業同の微かな痕跡

平地の三県境

遠山 元信

今年になりテレビや新聞等で大々的に紹介されたのでご存知の方も多いと思われるが、国内では珍しい平地における埼玉、群馬、栃木の三県境の位置に杭が打たれ注目された。場所は図１の地点になる。

図1.　三県境 広域図

図2.三県境 拡大図

山間部や河川の中などには三県境があちこちに存在するが、調べてみると平地における三県境は確かに珍しく、東武日光線柳生駅から 400m ぐらいの地点(図 2)のため見学も簡単に可能だ。

その三県境は正式には水路の中であるが、幅の狭い水路(下水)の中なのでその水路のほぼ真ん中にコンクリートの杭が打たれ(図3)、その頭には三県境界という金属標(図4)が取り付けられている。

図3.三県境の現地

図 3 を見ると判るが、西側は群馬県邑楽郡(おうらぐん)板倉町、南側は埼玉県加須市(旧・大利根町)、北側は栃木県栃木市になる。図 2 は現在の最新地形図だが、まだ三県境の位置がズレているので注意が必要だ。この地点は明治 10 年代の二万分の一陸軍迅速測図で見ると、旧渡良瀬川の河川が大きく左向きに蛇行しているところへ、地元では著名な谷田川が合流していた

。図 2 を見てもらえば判るが、藤岡町下宮の表示左側の県境の記号が大きく弧を描いているところが旧渡良瀬川の流路になる。昔の河川は蛇行が酷く、特に関東平野の場合は明治43 年の大水害が契機となり河川改修が本格的に始まり、それは終わることなく現在でも続けられている。北側に渡良瀬遊水地が設置されことから、渡良瀬川と谷田川の流路変更により、河川の中だった筈の三県境の合流地点が図 3 のような水路になり簡単に見学可能になった。

図4.三県境の境界杭

地元ではこれを新聞発表したことから観光目的に利用しようと埼玉県側には見学者用に駐車場とトイレまで整備、付近の住宅地の中には現地までの看板が目立ち迷うことはないようになっているが、見学時に会った地元群馬県側の板倉町商工会の方の期待とは違い、どうも見学者は稀のようだった。

＊＊＊

行ってきました

関東ふれあいの道　神奈川県9

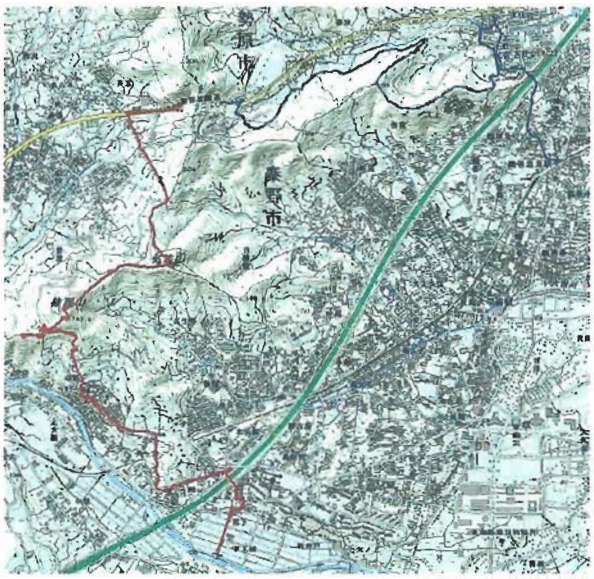
弘法大師と桜の道

今井　秀正

2017 年 1 月 9 日(月曜日・祭日)雨のち曇り
参加者:北野、片野、鶴田、大西、渡辺、関、今井(7 名)

AGC の会山行「関東ふれあいの道・GPS 山行」は、今年から神奈川県を主に行うことになった。新年山行として「弘法大師と桜の道」を歩いた。

昨夜からの雨が何とか上がったのでやれやれと思いつつ、10 時に秦野駅に集合して平塚駅行きのバスに乗り、コース基点の南平橋バス停に向かった。走り出して間もなくバスのワイパーが動き出したではないか。仕方なく傘を出して出発 10 時半。住宅地をほぼ北上し、秦野で一番古いという健速神社に突き当たる。右から回り込んで東名高速道路峰ノ上橋を渡り、県道 613 号の舗装道路を 400mほど西へ歩き、関東ふれあいの道の標識を右に入る。出発点からの案内標識はよく整備されている。これがなければ悩みながら歩くことになり、時間がかかることだろう。次第に高



度が上がるけれど、しばらく周囲は住宅地。なぜこういうコース設定になっているのだろう。やがて道は林道につながり、権現山と浅間山の鞍部の駐車場に到着、11 時 20 分。左手に満開のロウバイが 3,4 本見え、そのままコースを逆に進み、浅間山の四阿で雨具の始末をして権現山方向へ。雨は上がった。急な階段をのぼりつめて頂上 243.3mに到着(3 等三角点)。立派な 8 角形の弘法山公園展望台がある。江の島など 360 度下界の展望はあったものの、遠景の富士山や箱根は雲が邪魔だった。少し風があったので展望台下の陰でゆっくり昼食。小田急線の電車の音が足元で聞こえる。

北東の弘法山 235mまでは 800mほど。桜並木があり、花の時期は素晴らしいとのことだ。平らな頂上には太子堂、鐘楼があり、井戸もある。格子で蓋がされているので中を覗き込むことはできない。すぐ脇に手押しポンプの井戸があり、水は十分に出る。山頂の井戸の水位はどれほどなのだろうか。太子堂内には実物大程の弘法大師の黒い座像が祭られている。

「ふれあいの道」は堂の左わきの急坂を北へ一気に 100m ほど下りながら 400mほど進んだところに関東ふれあいの道は左折、の標識がある。普通のハイキングコースはそのまま善波峠に続く尾根を進んで吾妻山へ向かう。左側にミカン畑を見ながらさらに下る。ミカン畑が切れると、目障りな電線が無く、高松山やシダンゴ山方面の景色が開ける。馬場と乗馬クラブの建物も見える。展望がなかなか良い。

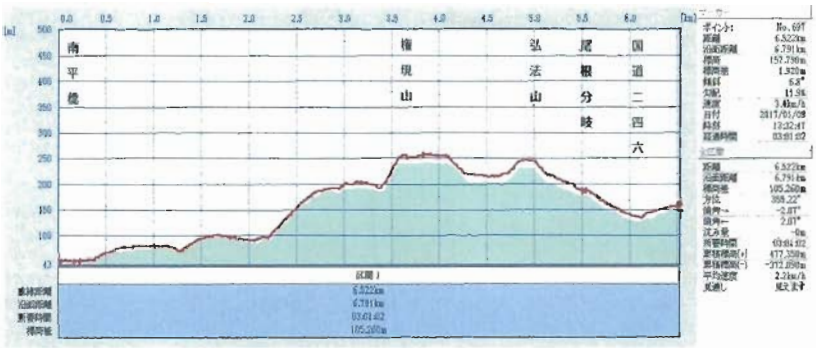
「ふれあいの道」の地図は国道 246 号へ出て右折し、点線で描かれた新善波トンネルをくぐれ、ということになっている。トンネル内の歩道は一段高くなってはいるが、ガードレールはない。大型トラックなどがひっきりなしに通るし、目には見えないものの、ディーゼル車の排気ガスなどの粉じんは相当なものだろう。手ぬぐいや丸めた帽子で鼻を覆い、早々に 200mほどの距離を通り抜けた。とにかく、このコース設定はいただけない。地図には、「自然歩道として適さない区間を連絡区間(点線で記載)とし、自然歩道としての維持管理区域から除外しています。」とある。それならば通常のハイキングコースにすればよいと思うのだが、そうはいかない理由があるのだろうか。

トンネルを抜けて国道を少し下り、右側にある標識に従って矢倉沢往還道へ下る。東海道ができるまでは江戸から沼津へ向かう官道だったという歴史の道だ。畑と斜面の藪の間を抜ける路傍に「夜泣き石」といわれる丸い石が斜面に埋まり、5~60cm程顔を出している。官道時代に行倒れた旅人に由来するものとのことだ。今では近くに人家が迫っているが、その昔は人里離れた寂しいところだったことがうかがえる。道は吾妻山分岐点へ。

ここから右上へ折り返して急な登りになり、ミカン畑の脇を登りつめると程なくハイキング道に突き当たる。これを左に折れるとすぐに吾妻山。下り始めて間もなく鶴巻温泉方面を右に分ける標識があり、我々はそのまま左へ回り込みつつ下って先ほどの矢倉沢往還道に合流。住宅街を抜けて「弘法大師と桜の道」終点の堀之内バス停着 14 時 50 分。

バスの待ち時間が 30 分ほどあるので、そのまま徒歩で住宅街を途中まで戻り、鶴巻温泉駅へ向かった。15 時 15 分着。出発から 4 時間 45 分のハイキングだったが、昼食と浅間山の小休止 1 時間余を差し引くと正味 3 時間半ほど。少し雨には見舞われたが「丁度良い加減」の初歩きを楽しむことが出来た。引き続き海老名駅前に移動し、鶴田さん予約の会場で新年会の後、今年の初山行をお開きにした。

(GPS データは渡辺会員提供)　　以上



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

国会図書館・地図室利用のすすめ

国会図書館の地図室では明治以降の国内外の一枚モノの地図や全国の住宅地図、そのほか地図に関する図書などが閲覧利用できます。

一般の図書と同様に出版社や地図作成機関等の全ての納本や寄贈などにより、一枚もの 50 万枚、住宅地図 7 万冊を収蔵。 これらの資料は館内の NDL-OPAC で検索し閲覧申込をすることで利用でき、複写も可能です(但し著作権法の規定のより 1/2 まで) 是非一度利用してみてはいかがでしょう。

地図室は国会図書館本館4階、月～金9:30～19:00、土～17:00(日曜休館)

なお、国会図書館の地図分類番号を近々AGCホームページに掲載いたしますので、参考にしてください

AGC レポート vol-57 2017 年 1 月 31 日発行
発行:日本山岳会・山岳地理クラブ(代表・北野忠彦)
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会 気付
TEL 03-3261-4433　FAX 03-3261-4441
編集担当:近藤　E-mail:yoshi-kondo@jcom.home.ne.jp